居場所論：文人墨客篇（その二）

～彼らにとっての居場所･「居場所的な存在」･「居場所のようなもの」～

天沼　香

はじめに

本稿は、私の一連の「居場所論」の一環を成す稿であり、拙稿「居場所論：文人墨客篇（その一）」(『東海学院大学紀要』第７号＝本号、2013 年）の続稿である。

したがって、本稿の「はじめに」は、「居場所論：文人墨客篇（その一）」の「はじめに」（正）、同（続）と共通するところが多いので、それに譲り、多弁を弄することは避けよう。

ただ、ここでは、前稿でも述べておいたように、所謂、文人墨客と称される人びとばかりではなく、もう少し広く､映画俳優､諸々のプロフェッショナルな運動選手等々といった、やや特異な職業人の人びとの居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」にも触れたいと考えていることは言っておかなければなるまい。

６．「ひまわり」、「シェルブールの雨傘」、あるいはマルチェロ・マストロヤンニの居場所

この世に生まれ出てきたばかりの赤ちゃんにとって、かけがえのない「居場所的な存在」は、なんてったって優しく抱っこして、おっぱいを含ませてくれるお母さんだよなあ。

お母さんの柔らかく包んでくれる胸だよなあ。

すっぽり包んでくれるひざとおなかだよなあ。

おんぶしてくれる背中だよなあ。

乳母車とか、ゆりかごとかも赤ちゃんにぴったりお似合いの「居場所のようなもの」だね。

赤ちゃんより、ちょっと大きくなった子にとっては、なんといってもお母さんのおひざの上だよね。
「ママのおひざはよいおひざ～」って歌われてるくらいだからね。

さらに、もうちょっと大きくなった子どもたちにとっては、楽しく一緒に遊んだり、額を寄せ合って勉強したりする仲間たちや、児童生徒を我が子のように慈しみ育ててくれる情感豊かで理知的な素敵な先生がいっぱい居れば、そして、陰険ないじめっ子さえ居なければ、小学校や中学校は心地よい居場所だよなあ。

きちんと自分の将来を見据え、主体的に専門知識を修得し、幅広い教養を身につけ、教授たちや友人たちとの知的な交わりを楽しもうとする大学生にとっては、大学は心地よい深遠な居場所となるだろうね。

学問研究や学生の指導が仕事であり、生きがいでもある研究者にとっても、小宇宙としての大学、真理探究の場としての大学は格好の居場所だよな。大学が本来の姿である限りにおいて・・・、だけどね。

街中では、所在無げで、頼りなさそうで、流行の最先端には程遠く、っていうか、そういうことには無関心で、お世辞にもカッコいいとは言えない学者が、大学構内の研究室や講義室なんかでは断然、光彩を放っていることって、よくあるもんな。

かのノーベル医学賞の山中伸弥京大教授みたいに、さっそうとしてて、どこにいても絵になる学者もいるけどね。

民俗学や文化人類学の実地調査のため、野に出て資料収集している時の和歌森太郎教授や梅棹忠夫教授や泉靖一教授は颯爽としていた。

器量の大きい豪胆な和歌森さんや梅棹さんや泉さんらにとっては、狭い研究室なんかよりも、むしろ縦横に発想できる日本や大興安嶺、ユーラシアやアフリカや南米の大地、南太平洋の島々など、国内外各地の野外のほうが大切な居場所だったんだ。

研究室での、和歌森さんはもちろん、家永三郎教授や横山亮一教授も、真摯で、鋭くて、厳しくて、優しくて、楽しくて、研究者としても教育者としても、この上なく学びがいのある人たちだった。

だから、学生時代の虎三は、あまりにも心地よいものだから和歌森研究室や家永研究室や横山研究室を自分の「居場所のようなもの」と心得ていたって言ってたよ。

先生方にとっては、「とんでもない心得違いをするやつ」だったかもしれないけどね。

そこには、垂涎の書物や資料も山積みだったし、吟醸酒、麦酒、葡萄酒など、煎餅や饅頭などなど、美味しい飲み物やお菓子、山海の珍味も山積みだったらしいしね。

こうした先生方の研究室では、教授も学生たちも水を得た魚みたいな様子で、談論風発。こんな知的な人間的

な居場所にいる時には、教授も学生たちも生気にあふれ、光り輝いて見えたようだなあ。

学生の頃、こうした敬愛してやまない先生方の研究室に出入りできるようになった時には、虎三はとても大切な「居場所的な存在」や「居場所のようなもの」とめぐりあえた幸せ感に包まれて毎日、夢見心地だったって述懐していたよ。

人がキラキラ輝く居場所・・・。

そんな居場所は、お相撲さんにとっては土俵。

土俵上の双葉山関、安芸の海関、栃錦関、若乃花関、大鵬関、柏戸関、輪島関、三重の海関、千代の富士関、白鵬関、・・・。

受けて立って相手を難なく土俵に転がす横綱相撲、堂々の押し相撲、強烈な張り合い、切れ味抜群の上手投げ、はたまた下手投げ、・・・。みんな強くて、つやっつやに輝いてたよなあ。

そんな居場所は、職業野球選手にとっては野球場。

三塁の長島茂雄選手、一塁の王貞治選手、二塁の仰木彬選手、遊撃の吉田義男選手、左翼の金本知憲選手、中堅の柴田勲選手、右翼の鈴木イチロー選手、村山実投手、小山正明投手、ジーン・バッキー投手、江夏豊投手、稲尾和久投手、金田正一投手、権藤博投手、村田兆治投手、鈴木啓示投手、野茂英雄投手、山本和行投手、田淵幸一捕手、野村克也捕手、古田敦也捕手、その他、三宅秀史選手、中西太選手、張本勲選手、ランディ・バース選手、掛布雅之選手、落合博満選手、門田博光選手ら、海の向こうのベーブ・ルース、タイ・カッブ、ルー・ゲーリック、ジョー・ディマジオ、ミッキー・マントル、カル・リプケン、・・・。

華麗な超美技、滞空時間の長い本塁打、小気味良い鋭い打球の二塁打、快足を飛ばしての絶妙な好走塁、うなる豪速球、七色の変化球を交えた配球などなどが甦るよね。

そんな居場所は、女優さんにとっては銀幕。

「ガス燈」のイングリット・バーグマン、「風と共に去りぬ」のビビアン・リー、「黒衣の花嫁」のジャンヌ・モロー、「昼下がりの情事」のカトリーヌ・ドヌーブ、「ひまわり」のソフィア・ローレン、「スウェーデンの城」のモニカ・ヴィッティー、「ブーベの恋人」のクラウディア・カルディナーレ、「華麗なるギャツビー」「麗しのサブリナ」「ティファニーで朝食を」のオードリー・ヘップバーン、「卒業」のアン・バンクロフトやキャサリン・ロス、「ソルジャー・ブルー」のキャンディス・バーゲン、「黄昏」のジェーン・フォンダ、「ザ・ボディガード」のホイットニー・ヒューストン、「キューポラのある街」の吉永小百合さん、・・・、みんな、きらきら美の化身みたいに綺麗で・・・妖艶だったり、可愛かったり、あまりにも魅惑的だったよなあ。

そんな居場所は、男優さんにとっても銀幕。

「カサブランカ」のハンフリー・ボガード、「哀愁」のロバート・テーラー、「慕情」のウィリアム・ホールデン、「いそしぎ」のリチャード・バートン、「シェルブールの雨傘」のマルチェロ・マストロヤンニ、「太陽がいっぱい」のアラン・ドロン、「シシリアン」のジャン・ギャバン、「ローマの休日」のグレゴリー・ペック、「ウエストサイド物語」のジョージ・チャキリスやリチャード・ベイマー、「シェーン」のアラン・ラッド、「夜の大捜査線」のシドニー・ポアチエ、「イージー・ライダー」のピーター・フォンダやデニス・ホッパー、「追憶」のロバート・レッドフォード、「ドクター・ジバゴ」のオマー・シャリフやアレック・ギネス、「００７」シリーズのショーン・コネリー、「プリティ・ウーマン」のリチャード・ギア、「幸せの黄色いハンカチ」や「網走番外地」の高倉健さん、「若大将」シリーズの加山雄三さん、・・・、みんな、にくたらしいほどに美男子だったり、カッコよかったり、シブかったり、キザがサマになってたり、伊達者だったり・・・だったよなあ。

俳優さんたちは、自らの生きた証として、銀幕のなかに恒久的な居場所を得ることが出来た稀有な幸せな人たちだって言えるかもしれないね。

お相撲さんや職業野球選手、蹴球選手等、一芸に秀でた人たちも、それぞれ、土俵とか、野球場とか、蹴球場といった特別な居場所を得られた幸運な人たちって言えるだろうね。

もちろん、その場に、すっくと立つために、それぞれ稽古場、練習場といった、より日常的な居場所で血のにじむ努力をしてるんだけどね。

職業上の居場所が、自らにとって格好の居場所になる人は、少なくとも世俗的にはとても幸せだよな。

それと、私生活において、生き生きと振舞える、ゆったりできる幸せな居場所、「居場所的な存在」や「居場所のようなもの」を得られたかどうかっていうのは、また全くの別問題と言わざるをえないけどね。

選挙の結果、国会議事堂を職業上の居場所となし得ることになった「選良」たちは、日本の、そして世界の将来を見据えて行動する、未来を託せる存在なんだろうかね。

こうした場を自らの居場所と心得る「選良」たちは、まずは人格高潔で、公正無私で、高い先見性と識見と指導力・企画力・行動力を、そして豊かな想像力と他者、殊に社会的弱者のことを思いやれる人間性を備えた人間であってほしいけどね。

日本にも、

過去(の歴史)に学ばない者は同じ過ちを繰り返す
(ドイツ、ワイツゼッカー大統領)

我われは、発展するために生まれてきたのではなく、幸せになるためにこの地球にやってきたのだ
(ウルグアイ、ムヒカ大統領)

などと語れる政治指導者が現れるといいけど、これは「依木求魚」の類かなあ。

7．恋する女や男の居場所、でも「ひとりじょうず」も

思春期のうら若い恋する乙女は、頼りがいのある彼の逞しい胸に抱かれているとき、「時を止めて！こここそが私の居場所」・・・なんて思うかもしれないね。

美しい乙女に熱熱の青年は、優しい彼女の柔らかい胸に顔を埋めているとき、「時間よ、止まれ！こここそが僕の居場所」・・・って思ったりするかもしれないよな。

これに関しては、逆に、「優しい彼の柔らかい胸・・・」、「頼りがいのある彼女の逞しい胸・・・」っていう場合もあるんだってことも言っておかないと上野千鶴子さんにしかられるよね。

いや、しかられるとかじゃなくて、男女の身体的な特徴や男女の社会的な役割分業を決め付けるのは間違いだもんね。

でも、中原中也さんみたいに、みちこに対して、

そなたの胸は海のやう
・・・

って謳うと、やわらかく無限抱擁が可能な豊饒な女人の胸が想起されるけど、男子の胸をそんなふうに形容しても、ちっとも感じが出ないのは事実だね。先入観に捉われてるとか、決めつけとかじゃなくてね。

でも、昨今、異性の胸が居場所なんて、浪漫的なことをいう若者たちが減ってきたみたいだよ。

純愛なんて言葉が消えてなくなって久しいし、恋愛観も変わってきたようだね。

恋愛のもろもろの過程を経る、その方法が分からないとか、面倒くさいとか、失恋して傷つくのが怖いとか・・・わけのわからないことを言う若い男女のが増えてるんだ。

精神的に相手の異性を理解しよう、理解したいという欲求が減退しているのかなあ。

相手に触れたい、ひとつになりたい・・・というような肉体的な欲求も減退しているのかなあ。

女も、男も、ともにね。

他方では、いまだに異性を性の対象としてしか見ない、または見られない向きも少なくない。

殊に男においてね。

どちらも、女と男の共感的相互理解の促進や人類のたおやかな種の保存のためにはゆゆしい問題だよな。

同性同士の交遊が勝ってきているという現実を踏まえてか、何だかちょっとわざとらしい「女子会」なんていう新語が登場してきて、それに乗せられるかのように女たちだけの集まりが余計に流行ったり、それに便乗して売り上げを伸ばそうとするはしこい飲食店なんかも増えているんだな。

中島みゆきさんのかつてのはやり歌じゃないけど、「ひとりじょうず」な人たち、そして同性との付き合いを好む人たちが増えてるよ。

社会もそういう人びとの志向に合うようにもろもろの装置を作ってるよね。

都会の密なところでは、うっかりすると数十平方米に一軒は存在するといわれる自ら「便利」を謳う小型雑貨商店。

この手の万屋（よろづや）は、午前七時から午後十一時までとか言いながら、一晩中、開いていて、すぐに食べられる一人分の食料をいつでも買えるように用意しているね。

味気ないし侘しいけど、一人でも十分、暮らせるんだな。

そんな毎日は、小田和正さんじゃないけど、

愛のない毎日は自由な毎日
誰も僕を責めたりできはしないさ
・・・
(小田和正「眠れぬ夜」)

って感じかもしれないね。

誰にも束縛されない、誰からもとやかく言われない、自分一人だけの居墓所っていうのも、それはそれでいいものかもしれないね。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならむ。まぎるる方なく、ただ一人あるのみこそよけれ。
（吉田兼好『徒然草』新潮古典文学全集）

兼好法師も、こんなふうに言ってるよ。時と場合によっては、ゆったり一人で居られる居場所なんていうのは、贅沢な居場所の部類に属するかもしれないね。

8．「会社命」、あるいはモーレツ社員または企業戦士、またあるいは会社を居場所と心得る人

青壮年期の働き盛りの人たちで、かつての高度経済成長期や泡経済期にもてはやされたモーレツ社員や企業戦士よろしく、今も「会社命」とばかりに、忠誠心を引っさげて我が社こそ自分の居場所と心得ている人も少なくはないみたいだよ。

必ずしも本意、本心じゃなくとも、とにかく、いちおう、そういう姿勢を見せて遮二無二、頑張っておかないと、そして実際に業績を上げておかないと、たちまち窓際に追いやられちゃうっていう厳しい雇用事情も手伝ってるんだけどね。

終身雇用、年功序列、企業内組合、系列取引っていうような日本的経営のありようが、表面的には上手くいっていたかにみえていた時代の産物であるモーレツ社員とか企業戦士とかいう呼称自体は、日本的経営のありようともども過去のものとなったよな。

終身雇用、年功序列といった経営者側からするところの、ある種「恩情」や「温情」に発する「うま味」があったからこそ、雇用される側の労働者たちも、甘んじてモーレツ社員やら企業戦士をやってられたって言えるよね。

けれども、日本的経営のありようがやりゆかなくなってしまい、そんな「うま味」も雲散霧消してしまって以降、むしろ組織への忠誠心や過重な労働を強いるような傾向が強化された感があるから、いちおう「会社命」を標榜する人たちがまだ少なくないのかもしれないね。

まあ、面従腹背の人も多いけどね。

けっして「会社命」とかじゃない、仕事帰りのお疲れお父さんにとっては、馴染みの気易い一杯飲み屋さんなんかが、しばしの息抜きの居場所になるんだよね。

「らっしゃあ〜い！まいどっ！」
「よう、大将！いつものあれと揚げ出し豆腐と肉じゃがと冷酒！」
「はいよっ！」
「どうかね。景気は」
「いやあ、まあ、ぼちぼちですわ。旦那のほうはいかがで？」
「いやあ、まあ、こっちもぼちぼちってとこかな」
・・・
「へい、お待ちぃ！」
「おう、今日も美味そうだな」

ってな感じの、単純できさくな気の凝らない、いささかの気どりもない言葉のやり取りと、いつもの庶民的な味が、お父さんの会社での緊張感を解きほぐしてくれるんだよな。

これが、お疲れ気味のお父さんには、こたえられないんだよ。

こんな街の片隅のささやかなところにも、お父さんのちょっとした息抜きのくつろげる居場所があるんだね。

9．山上憶良そして橘曙覧、あるいはウチに居場所のあるお父さん

なんてったってウチこそ一番っていう感じで、終業時刻を迎えるや、一目散に帰宅するお父さんもいるね。

そういうお父さんにとっては、家族、家庭、ウチこそが、一日の疲れを癒してくれる、とっても安らぐ居場所なんだ。

そんな家庭では、みんな、仲が良いんだな。

お父さんが帰宅するや否、

お父ちゃん、お帰りなさい〜。あんなあ、僕なあ、今日、学校でな、先生に褒められてしもてん・・・

お父ちゃん、ウチ（私）かてな、今日、センセに、褒められたんえ・・・

な〜んて感じで、元気よく坊ややお嬢ちゃんたちが駆け寄ってきて、お父さんにまつわりつく。今日一日の出来事を話し始める。

子どもたちにとって、学校は日中における大切な居場所なんだから、こんなふうに、家庭でも話題になる学校の先生っていうのは、まずは児童生徒思いで、責任感と存在感のある良い先生なんだよな。

子どもたちになつかれるお父さんは、共働きであれ、専業主婦であれ、その子どもたちのお母さん、すなわち、

自らのお連れ合いとの意思疎通もかなりうまくいってることが多いんだ。

そして・・・、こういうお父さんは、とても素直にお連れ合いの胸に甘えられる人なんだよな。

そういうお連れ合い同士の間では、性的不一致に端を発する諸問題なんて、まったくの他人事。

精神的な繋がりが深ければ、おのずと肉体的な繋がりも濃くなるものだからね。

周りからなんと言われようと、家族が一番、ウチが一番って、臆面もなく言えるお父さんは、それはそれでカッコいいよな。

いにしえの日本なら、まずは、この人だろうね。奈良時代前半期に活躍した万葉歌人、山上憶良さん。

彼に関しては、拙稿「居場所論：子ども篇（その一）～前近代における「子ども」という存在の歴史的位相～」（『東海学院大学紀要』第3号、2009年）でも触れているので、重複の煩は避けよう。

有り余る才能に溢れながら、有力貴族の家の出でなかったばかりに、せいぜい立身したところで知れていたんだな。役職的には、遣唐少録や筑前守などで終わってしまった代わりに、大伴旅人さん・家持さん父子や柿本人麻呂さん、山部赤人さんらとともに代表的な万葉歌人のひとりに数えられるに至ったこの人。

出世はかなわなかった分、妻子はもちろんのこと、貧しい人びと、恵まれない人びとへの眼差しは細やかだったよなあ。

憶良らは　今はまからむ　子泣くらむ　それその母も吾を待つらむぞ

（山上憶良『万葉集』巻五）

銀も　金も玉も　なにせむに　まされる宝　子にしかめやも

（同右）

これらの歌の詳細な解釈は、前掲拙稿に譲るとして、ともかく憶良さんにとっては、荘厳な宴の場よりも、妻子の待つ我が家のほうが、よほど大切な居場所だったんだね。

憶良さんは、古代日本きっての「我が家お父さん」だったんだなあ（注：私は、日本語での叙述に際しては、英語または英語的表現の和製英語、その他の言語を用いた表現、和製外国語および、それらに連なる似非外国語表現の使用は最大限に避けたいと考えているので、日本におけるかつての流行語「マイホームパパ」などという表現も忌避し、「我が家お父さん」とする次第である）。

憶良さんこそ、日本における元祖「我が家お父さん」、「我が家お父さん」の草分けって言える人物かもしれないね。

原始古代から今日に至るまで、この系譜に属するお父さんは、常にごまんと生息し続けているけどね。

江戸時代末期、福井の人、国学者にして歌人、橘曙覧（たちばなあけみ）さんは、どうやら、かの奈良時代中期に権勢を誇った左大臣橘諸兄さんの子孫らしいっていう話もあるね。

ってことは武家の棟梁としての資格を持ち合わせていた人って言えるわけだね。

だけど、曙覧さんは、幕末乱世の世に賢候の誉れ高かった越前福井藩主、松平春嶽さんから出仕を乞われても、やんわりと断り、終生、清貧に甘んじた野の偉賢だったね。最後にはどうしても断りきれずに、ちょっとだけ仕えたって話もあるけどね。

正岡子規さんは、彼のことを源実朝以来の歌人と絶賛している。ドナルド・キーンさんも高く評価しているね。

彼は、全首「たのしみは」で始まり、「とき（時）」で終わる「獨樂吟」五十二首のなかで、こんな歌を詠んでいるよ。

たのしみは妻子（めこ）むつまじくうちつどひ頭ならべて物を食ふ時

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうましうましといひて食ふ時

たのしみは家内（やうち）五人五たりが風だにひかでありあへる時

たのしみは田づらに行きしわらは等が犂鍬とりて帰りくる時

たのしみは三人の児どもすくすくと大きくなれる姿みる時

たのしみは機おりたてて新しきころもを縫いて妻が着る時

（橘曙覧「獨樂吟」[「志濃夫廼舎歌集」『近世和歌集』（日本古典文学大系93）岩波、1966年初]）

曙覧さんにとって、連れ合いや子どもたちとともに仲むつまじく居る家こそが最高の居場所だったんだなあ。そして、妻や子どもたち、さらには気の置けない友人たちこそが、大切な「居場所的な存在」だったんだね。

彼は、二歳で母を亡くし、十五歳で父を亡くし、二十一歳の時、生涯の伴侶、奈於（なお）と結ばれる。二十五歳の時、長女が生まれるが生後間もなく亡くなり、翌年生まれた次女も同じ運命を辿り、三十三歳の時には漸く四歳まで育っていた可愛い盛りの三女が亡くなる。

こんな喪失の体験がいっそう曙覧さんを家族思いの人にし、「家内（やうち）」という居場所を大切にする人にしたんだなあ。

彼は、三十四歳以降に授かった長男、次男、三男を、そして糟糠の伴侶、奈於を終生、慈しみ愛することに全力を尽くした人だったよ。

なにはなくとも家族みんなが健康で、食卓を囲み、粗末なおかずでも、わいわいがやがや楽しく語らいながら食べる夕餉のひと時の幸せ・・・。

曙覧さんは、こんな日常のなかに自らの安らげる居場所と「居場所的な存在」を見出していたんだね。

曙覧さんは、日常のささやかな家での出来事＝「居場所のようなもの」にも楽しみを見つけ出すことのできる生活人だったよ。

> たのしみは朝おきいでて昨日まで無かりし花の咲けるを見る時
>
> （同右）

こういうちょっとした変化に気づくことで、彼は、自分のつましい住まいを楽しい居場所にできていたんだね。

彼のこの歌は、太平洋を隔てた異国の大統領までをも感動せしめているよ。

すばらしい感性の賜物は、文化の違いを超えて、人を感動させる力を持っているんだね。

友だちなんかも、とても大事にして曙覧さんは詠んでいるよ。

> たのしみは心をおかぬ友どちと笑ひかたりて腹をよる時
>
> たのしみはとぼしきままに人集め酒飲め物を食へといふ時
>
> （同右）

すてきだね。いいよね。こんな友との語らい。

いいよなあ。この大らかさ。

楽しいよなあ。この感性。

こういう居場所そして「居場所的な存在」や「居場所のようなもの」を彼は日常のそこここに、いっぱい持っていたんだね。

そうかと思えば、曙覧さんはこんな歌も詠む。

> たのしみは草のいほりに筵敷ひとりこころを静めをるとき
>
> （同右）

曙覧さんは、つましい居場所としての住まいを縦横に活用し、そこで、連れ合いや子どもたちを大切にし、友人知人たちとの交流を楽しみ、はたまた「ひとりじょうず」をも謳歌し、草木虫魚を愛で、貧しさなどは笑い飛ばせる闊達で風雅な生活人だったんだね。

家族、友人等との人間関係を大事にしながら、他方「ひとり」の時間をも珠玉のごとくいとおしむ人・・・ごく当たり前みたいだけど、この均衡のとれた、偏りのない感覚がすごくもあり、うらやましくもあるよなあ。

清く、貧しく、おごらず、たかぶらず、うつくしく生きた人生の達人だよな。

平凡な日々を非凡に生きた・・・みたいな、
なにげないけど、
寛仁大度、
なんか・・・
器の大きい、
度量の大きい、
悠揚せまらない、
すごい人だよなあ。

古代の憶良さんや近世の曙覧さんのような、すごい文人、すばらしい歌人にして、すてきな生活人っていうわけにはいかないにしても、近現代に至っても彼らの系譜に連なる、家族、家庭を大切にして、そこを自らの居場所と心得ているお父さんはごまんといるよね。

小市民的志向とか言われるかもしれないけど、そういうお父さんを擁する家庭は、それはそれとして、一幅の幸せな居場所の図だよなあ。

10. 広瀬惟然または種田山頭火、あるいはウチに居場所のないお父さん

他方では、ウチに居場所のない、ウチではすこぶる存

在感の乏しいお父さんもいるんだよなあ。
ウチに居場所のない、存在感の乏しいお母さんていうのは、あまり見聞きしないのにね。
どうしてかなあ。
男のほうが放浪癖があるのかなあ。
男のほうが浪漫主義的なのかなあ。
男のほうが身勝手なのかなあ。

財津和夫さんも、歌ってるね。

わがままは男の罪、それを許さないのは女の罪･･･
（チューリップ「虹とスニーカーの頃」）

男の我が儘を許さないのは女の罪なんて、それこそ、男の身勝手な言い草だけどね。
男の我が儘、身勝手、放浪、漂泊、「一所不在」、「一所不住」っていうと、壇一雄さんの『火宅の人』とか渡辺淳一さんの『愛の流刑地』とか、無常漂泊の連歌師、飯尾宗祇さん、美濃で生まれ修行のために諸国を行脚しながら仏像を彫り続けた円空さん、業俳の俳諧師さんたちやら、蕉門十哲の一人、広瀬惟然さん、伊那谷を放浪した井上井月さん、流離いの果てに小豆島で星になった尾崎放哉さんとか、「行乞流転」の種田山頭火さんとか、かのフーテンの寅さんとか、・・・あれこれが思い浮かんでくるよね。
・・・
宗祇さんは、下賤の生まれで、応仁の乱の頃には戦乱の都を避けて関東を放浪し、都に庵を結んでからも都と山口や越後を幾度も往還し、八十二歳で箱根湯本に客死した漂泊の人ではあるよね。
だけど、彼の漂泊の旅は、山口往還は中国地方の大守護大名、大内政弘さんに招聘されての連歌会開催、文化交流のための旅だったし、越後往還も越後守護、上杉房能さんに招かれての旅だったよな。
言ってみれば、宗祇さんの漂泊の旅は、彼の文芸や才能を愛好する地方上流人士の後援ないしは主催による企画だったとも言えるね。
だから、俗世における生活のための漂泊だったとも言えるよ。仕事のための漂泊とも言えるよね。
そういう点では、江戸時代における、いわゆる「業俳」＝俳諧師の旅の嚆矢とも言えるよな。
しかし、後の「業俳」とは異なり、生活が保障された、恵まれた漂泊だったね。
とは言え、

世にふるもさらに時雨の宿りかな
（飯尾宗祇）

なんていう秀句には、宗祇さんの無情漂泊の人生観が絶妙に湧出しているけどね。
彼は、漂泊無情を詠う連歌師であったとともに、都にあっては新撰菟玖波集の編者で、北野連歌会所奉行といった顕職を務め、一条兼良、三条西実隆、飛鳥井雅親ら当代一流の上流階級の知識人たちと交流のあった室町時代後期の代表的文化人でもあったんだよなあ。

江戸時代初期の遊行僧、美濃出身の円空さんは、七歳の時にお母さんを亡くしているよ。
彼の彫った荒く鑿の目の残る夥しい数の仏さんの顔には、どこか優しさが滲み出ているけれど、これは彼のお母さんへの思慕の念が篭っているせいかもしれないなあ。
円空さんの彫った仏さんを見ていると、こちらまで穏やかな気持ちになり、思わず微笑みかけたくなるような心持になるもんね
円空さんは、木食戒の一、「一所不在」を守って遊行を続けたけど、最後は郷里の美濃に戻り、関の弥勒寺を再興し、そこの住職として入寂したよね。

寅さんは、気まぐれで、しかも確信犯的な風来坊だけど、心の奥底で、ちゃんと自分の居場所と心得る葛飾、柴又には、時を経て、きっちり戻ってくるんだよな。
柴又帝釈天の門前町のなかほどにある団子屋「寅屋」の二階は、しっかり彼の居場所として確保されてるしね。
陽気で、屈託がなくって、人懐っこくて、律儀で、正義漢で、ロードーシャ諸君の味方で、人情家で、きっぷがよくて、ええかっこしいで、ドジで、思いこみが激しくって、どうしたって憎めない寅さん。
その周囲には寅思いの善意の人たち・・・さくら、おいちゃん、おばちゃん、御前様、たこ社長、もちろん片想いの恋のお相手の憧れの女性も・・・。

だから、だから同じ漂泊の人でも、宗祇さんや円空さんや寅さんたちには、あれこれと救いってもんがあるんだけどね・・・。

濃州、関の人、惟然さんとなると、・・・まっ、ご本人はいいとして、・・・梅の花が散ったからって虚しさを感じられて、捨て去られた妻子なんかはちょっと気の毒にも思えるよなあ。特に、娘のともは不憫だよね。
ともは、自分を捨てた父を忘れられず、長年の後、偶々、

名古屋の街で見かけた父の袖に取りすがり、泣いて再会を喜び、離すまいとするのに、惟然さんのほうは、飄然と、

両袖にただなんとなく時雨かな

なあんて詠んで、すがるともを振り払い、そのまま人込みに紛れて去っていってしまったんだよね。

この句のなかの「時雨」は、もちろん彼の涙、ともの涙ではあったんだろうけどね。

また後年、父が京都に居ると風の便りに聞き知って、上洛した娘の消息を伝え聞きながら、またしても惟然さんは、

おもたさの雪はらへどもはらへども

とか何とか、謎かけ問答みたいな句を作り、古紙に認め、その下に笠を被った自画像を描いたものを知人に娘の元へ届けるように託し、自らは近くまで来ている娘に会おうともせずに、また旅の人となってしまったんだよな。

（『蕉門の人　広瀬惟然』［1997年、広瀬惟然顕彰・惟然記念館協力会］、沢木美子『弁慶庵と惟然さん』［1994年、関市大門町］、「関市史跡　弁慶庵」［惟然記念館］）

芭蕉なき後の蕉門にあって、師以上に徹底して「かるみ」を追究しようとした漂泊の俳人として評価の高い惟然さんだけど、かっぽっちゃられてしまった家族はたまったもんじゃなかったろうね。

そもそもいかにも商売向きじゃない人、まして養子向きじゃない人だったんだから、商家に養子に入ったりしたのが間違いだったんだろうね。

その句は、飄然としていて、本源的な寂しさを詠んでいて、蕉門のなかでも一頭地を抜いているけどね。

更け行くや水田の上の天の川

（秋挙編『惟然坊句集』玉山房）

なあんていう惟然さんの句など、同じく「天の川」を季語とした俳句でも、芭蕉翁の「荒海や佐渡によこたふ天の川」や、まして小林一茶さんの「うつくしや障子の穴の天の川」等々よりも、ずうっと深遠な人間存在の宇宙的孤独の本質に迫った凄い句だと思うよ。

普通の家に、普通の家族関係のなかに居場所を見いだせなかった惟然さんだからこそ作りえた句、とも言えるかもしれないなあ。

そうだよな。

普通の人は、あまり水田の畔で一人、更けゆく夜を過ごしたりはしないもんね。

そんな孤独な漂泊の旅路こそが惟然さんにとっての居場所だったんだ。

山口県佐波郡西佐波（現、防府市）生まれの山頭火さんとなると、なんか、もひとつ、これはちょっとやりきれないよなあ。

彼はお大尽の家に生まれたんだ。だけど、山頭火さんが十歳の時、彼のお母さんは自宅の井戸に飛び込んで、その生を自ら絶ってしまった。その直後に、現場で死せる母の冷たく光る白い肌に接した体験を、彼は生涯、ずっと引きずって生きたんだよ。・・・

母という居場所、「居場所的な存在」をあまりにも衝撃的なかたちで失ってしまった彼のその後は、・・・

長続きしない学業、生家の倒産、故郷を捨てての転居、身内の人びととの死別、乾いた結婚生活、出来た子どもともなじめない日々、神経衰弱、酒乱、長続きしない職業生活、自虐、頽廃・・・。

凄惨な落ち着きのない日々だった。

山頭火さんは、そうした日々の当然の帰結のように、妻子を捨てて、修業のような、修業とは言えないような「行乞流転」の放浪の旅に出る。

分け入つても分け入つても青い山
・・・
もりもりもりあがる雲へ歩む
・・・
柳ちるもとの乞食になつて歩く
・・・
日ざかり泣いても笑うても一人
・・・

（『定本山頭火全集』、1972年、春陽堂書店）

家族との関係性に安らぎを見いだせず、家に安住の居場所を見いだせなかった山頭火さんは、結局、後半生を句を作りつつ、半端な庵を営みつつ、時に悟りを求めつつ、時に自己観照に、時に感傷に浸りながら、自称「愚かな旅人」として、「乞食坊主」同然の流転の人生を送ったんだな。

ふとめざめたらなみだがこぼれてゐた
・・・

（同右）

なんとも、せつない句だね。

山頭火さんの人生は、お母さんが生き続けていたら、全然、違ったものになっていたろうね。

彼のお母さんが命を絶ったのは、自らの生きる拠りどころとなる居場所を失ってしまったがゆえの決断だったんだろうけど、それは自分の胎内から出てきた幼な子の居場所をなくしてしまう行為でもあったんだな。

有島武郎さんのお連れ合いの安子さんは、若くして結核で命を失う不幸に見舞われたけど、自らの死の姿を幼い三人の息子たちに見せないように有島さんに頼んでいたんだよ。

その母心を有島さんが代弁しているね。

> ・・・お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くすることを恐れ、お前たちの伸び延びていかなければならぬ霊魂に少しでも大きな傷を残すことを恐れたのだ。幼児に死を知らせることは無益であるばかりでなく有害だ。
>
> （有島武郎「小さき者へ」、同前）

・・・

山頭火さんのお母さんには、なんとか頑張って、もうちょっと生きてってもらいたかったなあ。

どうしたってお母さんは、幼い子どもたちの最大の居場所なんだから。

お母さんの胸は、胎内へ・・・海へ・・・宇宙へ・・・と連なる深淵な存在なんだから。

中高年のおじさんたちが自ら命を絶つのも、この世に自らの居場所はなくなったと断じてしまった結果かなあ。

せきをしてもひとり　　（尾崎放哉）

っていうような心境なのかなあ。

でも・・・

ひとりだっていい・・・んだよな。

孤立無援だって、恐れることなんか何もないよ。

ひとりがいいことだってある・・・んだしね。

家とか、会社とか、その他、もろもろの居場所をなくしたとしても、まだまだ、どこかに何らか、ささやかであっても、ひそやかであっても自分の居場所って、あるもんだよ。

山頭火さんだって、母という居場所、「居場所的な存在」をなくし、大学という居場所をなくし、家という居場所をなくし、職場という居場所をなくし、故郷という居場所をなくし、妻子という居場所は自ら捨て去り、神経衰弱や酒癖に悩まされ続け、生きることへの恐怖に苛まれ、自死を図ったこともあったけれども・・・、そんな居場所喪失の人生遍歴のなかで、なんとか放浪に生きて、旅路を「居場所のようなもの」とし、仮の庵を居場所として、奔放な句作をしながら、彼なりの生涯を全うしたんだからね。

11. 久保田万太郎、あるいは家に居場所のないお父さん（その２）

今や、男はソト、女はウチなんていう、男女役割分業の時代じゃないし、女性を家に縛り付けていた家族制度も過去のもの。

でも、その名残りのゆえかなあ・・・。そして、まだまだ家内労働は女性に押し付けられているせいもあるんだろうなあ・・・。

現今では、共働きで、ソトに出ていて、ウチにおける滞留時間は男性と変わらない女性が多くなっているのにも関わらず、良きにつけ悪しきにつけ、ウチの中では、女性の存在感のほうが圧倒的に顕著なんだなあ。

ウチにおいて、大した役割を果たさないお父さんの存在感が希薄だとしたら、それは自業自得かもしれないけどね。

結果として、お連れ合いからは疎んじられ、子どもたちからも軽んじられてる気の毒なお父さんは、仕方なく、どうでもいいような残業をしたり、ソトで時間を潰して遅めに帰宅するんだ。

帰っても、なんか居心地が悪い。

諸井薫さんは、「近頃、家の中に自分の居場所がない、という亭主族の嘆きがよく聞かれる・・・」（諸井『父の居場所』、1992年、中央公論社）って言ってるよ。

そのせいだろうか、個人住宅の設計に携わる建築家は、よく施主から「狭くてもいいから書斎を・・・」という要望を受けるんだって。

が、しかし、と諸井さんは問う。「では、その昔、父たちに居場所はあったのか」と。

彼の結論は、「身分の高い武士や大きな商家を別として、・・・市井の父たちの（家の中での）居場所は、囲炉裏や卓袱台の父としての定位置か、それとも時代劇によく出てくる長火鉢の向こう側くらいなものだった」（同

右）けれども、その定位置に父親が、どしんと構えていると、子どもたちが逃げ出したというものだった。

けれども、昨今では、お父さんのほうが家の中では孤立気味で、所在なげで、むしろ、子どもたちや妻から逃げ出したいから、小さくても書斎を欲すると言うのだよ。

小さな書斎＝家族からの公然たる避難場所＝ちょっと哀れなお父さんの居場所っていう等式が描けるね。

厄介者扱いされてるってほどじゃないのに、なんか、自分が余計者みたいな気がしてしまって、自分の家なのに気遅れしてしまって、こそこそっと人けのないところに退避してしまう・・・なんて感じのお気の毒お父さん、いないようで、結構、いるんだよなあ。

昭和戦前期のそんな感じのお父さんの代表格の図っていうわけじゃないけど、こんな俳句もあるね。

江戸情緒、下町情緒をこよなく愛した万太郎さんによって、句に詠み込まれると一幅の絵になってしまうところがみそだけどな。

夕端居（ゆうはしゐ）一人に堪へてゐたりけり

（久保田万太郎『草の丈』）

「端居」は、まだ冷房機とてなかった時代、暑さの籠もる家のなかから、家の端っこの縁側などに出て、少しでも涼を取ろうとしている図をほうふつとさせる夏の季語だね。

この句の出だしを「夕涼み」ではなく、「夕端居」としたところに、万太郎さんの気持ちが込められているよな。

「夕涼み」では、どうしたって、「一人に堪える・・・」と続かないんだよ。爽やかに過ぎてね。

やはり、堪えがたい家の中の暑さと、なんとなく家族から浮き上がっているいたたまれなさから逃れて、一人ぼっちに堪えている状態を詠むには、出だしは気分爽快な「夕涼み」じゃなくって、ちょっとおどろおどろしい「夕端居」じゃなきゃならなかったんだなあ。

時代はまだ父親の権威が絶大だった昭和戦前期だったにも関わらず、小説『朝顔』、『春泥』、『市井人』や戯曲『プロローグ』、『大寺学校』等とともに多くの佳句を残す三田文学の旗頭の一人として名をはせた万太郎さんも、家では、時に人知れず家族との距離に寂寥感を抱く孤高の人だったんだね。

あるいは、創作のために、あえて自らを孤高な境地に置き、それに耐えていたのかもしれないね。

万太郎さんがそんなだったからか、家庭生活は円滑とは言えず、彼は自らの死の五年前に、お連れ合いを亡くし、こんな慟哭の文章を残しているよ。

可哀想なかの女。・・・どうして、かの女は、その素直だった、やさしかった、もの分かりのよかった、かの女を、自分から否定しなければいけなかったのか？

（久保田万太郎「可哀想なかの女」[『水上瀧太郎・久保田万太郎集』現代日本文学全集 29、1956 年、筑摩書房]）

そして、万太郎さんは、その伴侶の自死の理由を「・・・畢竟、女房は、その放漫な、でたらめな、しめくくりのない生活の泥沼の中に哀しく溺れ死んだのである」（久保田「引越のこと」、同右）と捉えたんだ。

さりげなく自虐的で美しい追悼の文章ではあるよね。

結局、この家では、万太郎さんも、お連れ合いさんも共にウチのなかに居場所を見いだせなかったんだろうなあ。

でも・・・、そういう状況や心情を芸術に高めてしまうところが、万太郎さんと凡百のお父さんとの違いだよね。

でも・・・、ふつうのお父さんにはそういう境地は向いてないよなあ。

やっぱり、平凡な日常を一所懸命に生きてるお疲れお父さんには、ウチのなかに安らげる居場所が必要なんじゃないかなあ。

だから、家族みんなで、ウチのなかにもお父さんの居場所を作ってあげないとね。

それも敬して遠ざけるような居場所じゃなくってね。

お父さんも、正々堂々と家族の一員であることをワイワイ、ガヤガヤ主張できるような居場所じゃないとね。

そうしないと、お父さんがいじけちゃって、ソトにアブない居場所を作っちゃったりすることにもなりかねないからね。

そうすると、じゃあ私も・・・ってことで、お母さんも、ソトにアブない居場所を作っちゃったり、なんてことにもなりかねないしね。

お父さんにとって心安らぐ居場所じゃないウチ、そして家庭は、結局のところ、お母さんにとっても、子どもたちにとっても、安らげる居場所ではありえないんだよな。

家族みんなで、ウチを構成してるからには、ウチを、そして家庭を、みんなにとって心地よい居場所にしたいよね。

曙覧さんちみたいにね。

12. またまた居場所って、どんなとこ

居場所って、ひとりぼっち、ぽつんと居られる場所。
居場所って、気の置けない信頼できる人たちと居る場所。
居場所って、自分を解放できる場所。
居場所って、なんだか心が和らいで、とっても落ち着ける場所。
居場所って、そこはかとなく気が休まる場所。
居場所って、そこでは何ら気兼ねしなくて良い場所。

それは、時によって、互いに信頼し合える人たちが居る場所でもいいし、親しい人たちが居る場所でもいいし、楽しい仲間たちが居る場所でもいいし、自分だけ、一人ぼっちで居る場所でもいいよね。

五木寛之さんみたいに・・・

> 私は今でもやはり・・・港を持たぬヨット、故郷を失った根なし草でありたいと思う。人並み以上の安泰への望みを抱きながら、それでもなお、再び別な街へと漂流することになるのだろう。
> （五木寛之『風に吹かれて』、1972年、講談社）

なんて、さらっと言えたら、かっこいいけどね。彼は、日の当たる道を歩み続けたから、そんなふうに言えるんだろうね。かっこよく、風に吹かれて、漂流しながら、颯爽と生きてこられたんだよな。
そんな五木さんには、居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」なんかは不必要に思えたんだろうなあ。
しかし、五木寛之ならぬ平凡な我われには、あんなこんな、いろんな多彩な居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」が必要なんじゃないかなあ。
凡人の身としては、多彩なそれらを持てれば、きっと人生は彩り豊かなものになると思うんだけどな。

13. 奥の細道、あるいは芭蕉翁の居場所

人は、大きくなっていく過程で、いつの日にか、この世に生を享けた生きとし生けるものには、無限の命などはけっして与えられていないってことを知ることになる。
あるいは、知らされることになるんだよな。
何億光年の彼方から届く星たちの輝きは、確かに半永久的って言えるかもしれない。
大宇宙は無限で、果てしないかもしれないけれど、人間の住んでるこの小さな青い惑星のなかで生起する全ての事象は、悲しいほどにちっぽけで有限なんだよね。
永遠・・・無限の継続なんて、ありえない。

ものごとには必ず終わりがある。
人間の命だって、その例外ではありえない。

それぞれの人の人生って、その生の完結の時に向けて、その人なりに行進している過程なんだよね。
大宇宙の何億光年の彼方から眺めれば、地球上の個々の人びとの人生なんて、それこそ造次顛沛（ぞうじてんぱい）のうちに過ぎ去っていく、ちっちゃなちっちゃな出来事に過ぎない。
そんなことを、まだほとんど意識しないままに生きていられるのが子どもって、言えるかも知れないね。
そして、そのことに徐々に気づいていくことが大人になっていくってことなのかも知れないよね。

ホギャ〜とこの世に生まれ出て、
楽しく幼少の頃を過ごし、
元気に青壮年の時期を生きているうちに、
いつの間にやら、ゆるゆる年老いて、
やがて何らかの病をえたりして、
そろそろ衰え、
ついには死んでいく・・・

この事実だけは貴賤貧富を問わず、誰にでも平等に訪れる。
個々によって、多少の命の長短はあるにせよ、そんなもの、悠久の大宇宙の時の流れのなかでは誤差の範囲にもならないほどの微差に過ぎないよ。
当たり前過ぎるほど当たり前なこの事実、生老病死。

このあまりにも自明な、富貴貧賤を問わず何人たりとも抗うことはできない事実を、そのまますんなりと受容できるようになることが、精神的に大人になった証って言えるかもしれないよなあ。
もっとも、地震や津波や台風や洪水や旱魃などの自然の猛威によって、あるいはいろいろな人災や事故等によって、楽しく幼少の頃を過ごすどころか、既に幼い時期において、否応なく生の有限を知らされてしまう文明社会の子どもたち、第三世界の子どもたちも少なくないけどね。

文人たちの文芸も、畢竟、生老病死がその根幹にあるって言えるよなあ。

江戸時代、天和～元禄期に活躍、俳聖と謳われた松尾芭蕉さんは、常々、自分の全ての句が辞世の句と語っていたよね。それほどまでに、自作には一つも駄作はないという高い矜持を持っていたんだ。

芭蕉さんは、旅路そのものが自らの人生における居場所と心得ていたんだよね。

旅人と我名よばれん初時雨

（松尾芭蕉）

芭蕉翁は、かの紀行文学の名著、『おくのほそ道』の冒頭で、こんなふうに述べているよ。

> 月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。船の上に生涯をうかべ馬の口をとらへて老をむかふる者は日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず・・・
>
> （『校本芭蕉全集』、1969 年、角川書店）

その人生そのものの旅の途次で、彼はこんな句を詠んでるね。

この秋は何で年よる雲に鳥

（松尾芭蕉『笈日記』）

淡々としみじみと自らの加齢を詠んだ、人生の哀感が漂う句だよね。

そんなに意識していなかったのに、なんか、ふっと年取った自分に気付いた一瞬を見事に切り取って捉えているよなあ。

たおやかにして鋭い感性だね。こんな凄さに芭蕉さんが俳聖と称讃される所以があるんだろうね。

衣川の畔に佇めば、歴史にも造詣の深い芭蕉翁は、たちどころに、こんな名句をものにする。

夏草や兵どもが夢の跡

（松尾芭蕉『奥の細道』）

文字通り、判官贔屓の芭蕉さんは、この地で藤原泰衡さんの裏切りに遭い、無念の死を遂げた主従に優しく寄り添い、さり気なく、この気高い句のなかに、そして改めて衣川の地に源義経さんや武蔵坊弁慶どんの永遠の居場所を与えようとしているかのようだね。

さらに、芭蕉さんの感性と知性は、「兵ども」の列に藤原三代も加えていたのかもしれないね。四代目の凡将と言わざるをえない藤原泰衡さんが源頼朝さんの武威を恐れて、義経さんを裏切った挙句、清衡さん、基衡さん、秀衡さんと三代に渡って平泉の地で栄華を誇った奥州藤原氏を自滅させてしまったことをも惜しんだ、藤原三代を懐かしむ句でもあるように思えるよなあ。

鎮守府将軍として、いかんなく統治能力を発揮し、源平とともに武家の棟梁としての地位を確立し、東北地方を独立王国のように支配した藤原秀衡という人物への芭蕉翁の思い入れには相当なものがあったんじゃないかなあ。

何しろ、敗れ去りし者への共感の意識が強烈な芭蕉さんだからな。

翁は、近江の国、大津の義仲寺では、

木曾殿と背中合はせの寒さかな

（松尾芭蕉）

と詠むんだな。

これまた翁の判官贔屓の意識が見え隠れする句だよね。

このとびきり素敵な句のなかに、そして改めて義仲寺に、翁が大好きな悲運の旭将軍、源義仲さんの安住の「居場所のようなもの」を設けてあげているみたいだよ。

ひいては、この義仲寺の義仲さんのお墓の隣に、死後の自らの居場所を定めたことを宣言している句でもあるよね。

そうして、元禄７年（1694）10 月、大坂で病に倒れ、容態が悪化するなかで、芭蕉さんは呑舟さんに筆を執らせたね。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

（松尾芭蕉）

旅の人、芭蕉翁にこれほどぴったりの辞世の句はありえないよなあ。自らの人生の終わりの時に臨んで、なおこんな句を詠めるなんて流石だね。

芭蕉さんの俳風は「景先情後」を旨としながらも、ちゃんと自らの句のなかに生老病死、そして自らや愛する他者の居場所を詠み込んでいるんだよな。（芭蕉の句は、『笈日記』、『奥の細道』等所収）。

三十歳の若さで早世した中原中也さんは、

まことに人生、一瞬の夢
ゴム風船の、美しさかな。
（中原中也「春日狂想」）

と謳ってる。そして自分の人生を、

我が生は恐ろしい嵐のやうであった、
其処此処に時々陽の光も落ちたとはいへ。
（同「羊の歌」）

とも歌う。

短い人生のなかでも、光り煌く時期のあまりの短さ。
だから、一期は夢・・・。

14. 中世的人生観、あるいは「一期は夢・・・」

ちょっと時代が遡るけど、永禄3年（１５６０）5月、織田信長さんが、有力な戦国大名に躍り出るきっかけとなった合戦、桶狭間の戦いの直前のこと。

京に上ろうとする今川義元さんとの決戦を前にして、信長さんは、当時の居城、清洲城を出立する前に、愛好する「幸若舞」を舞ったと伝えられているよね。

大方の予測を覆して、うつけ者呼ばわりされていた信長さんは、この戦いで駿河・遠江の大大名、今川氏の野望を打ち砕き、一気に天下取り候補の一角に名乗りを上げた。

その後は、天下取りに向けて、「天下布武」の旗印のもと、着々と手を打っていった。

だけど彼は、天下取りを目前にして見せた一瞬の油断ゆえに、配下の知将、明智光秀さんの軍勢に取り囲まれ、本能寺で無念の死を遂げる。

その直前にも信長さんは、この舞いを舞ったとされているね。

よほど、この舞いが好きだったんだね。

人間五十年
下天のうちにくらぶれば
夢まぼろしの如くなり
ひとたび生を得て
滅せぬもののあるべきか

この「幸若舞」の一節は、中世最末期を疾風のごとく駆け抜けた風雲児、信長さんの死生観そのものだったんだろうなあ。

室町時代中期以降の流行歌謡を集めて編まれた、永正十五年（1518）完成の一巻本には、無常観漂うこんな表現があるよ。

世間（よのなか）はちろりに過（すぐ）る、
ちろりちろり。
なにともなやなふ、なにとも、
うき世は風波の一葉よ。
なにともなやなう、なにともなやなう、
人生七十古来まれなり。
ただ何事もかごとも、ゆめまぼろしや
水のあわ、ささの葉にをく露のまに
あじきなの世や。
夢幻や、南無三寶。
くすむ人は見られぬ、ゆめのゆめのゆめの
世をうつつがほ（現顔）して
なにせうぞ、くすんで（真面目くさって）、
一期は夢よ、ただ狂へ。
（伝・柴屋軒宗長編「閑吟集」『中世近世歌謡集』[日本古典文学大系 44]、1959 年、岩波書店）

いつの世でも、どんな世でも、人は人生の短さ、儚さを慨嘆するものみたいだなあ。

それにしても、「・・・ただ狂へ」は、ちょっと過激で、刹那的に過ぎるかもしれないけどね。

でも、「人生は短いんだから、どうせなら過度に品行方正、やけに四角四面に生きるばかりじゃなく、楽しく愉快に生きなくっちゃ」っていう感覚なら、分からないことはないなあ。

大伴旅人さんの、あの無常感を凌駕するような直截的な歌にも通じるものがあるよね。

生ける者ついにも死せるものにしあれば生ける間をば楽しくをあらな
（大伴旅人『万葉集』巻５）

情熱の歌人、与謝野晶子さんが詠んだ、

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君
（与謝野晶子「みだれ髪」[『与謝野寛・与謝野晶子・石川啄木・北原白秋　集』、1954 年、筑摩書房）

っていう、あの、自らの師、鉄幹さんに迫った、情熱のほとばしる歌にも通じるところがあるもんなあ。

萩原朔太郎さんの「どんな真面目な仕事も、遊戯に熱してゐる時ほどには、人を真面目にし得ない。――といふ事実ほど、人生のふまじめと無意義を語るものはない」（萩原「情調哲学　新しき欲情」［萩原前掲書］）っていう思考にも細々とつながっているような。

盛者必衰。
生者必滅。
会者定離。

きっと、それぞれの人は、誰もみんな、宇宙的孤独のなかで、絶対矛盾的自家撞着のなかで、全てが有限であることに端を発する寂寥感や無常観を少しでも和らげるために、何かを探し求めているんだろうな。

15. 幸せの居場所、あるいは山のあなた

それぞれに、絶対矛盾的自家撞着を少しでも解消するために、何かを探し求めているんだろうね。

その探し求めている何かのうちのとっても大切なひとつが多分、そこに幸せがあるかもしれない、心休まる、心温まる居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」なんだろうと思うよ。

山のあなたの空遠く
「幸」（さいわい）住むと人のいふ

ああ、われ人と尋めゆきて
涙さしぐみ、かへり来ぬ

山のあなたの尚遠く
「幸」住むと人のいふ

（カール・ブッセ［上田敏訳］「山のあなた」、『海潮音』［現代訳詩集』現代日本文学全集93、1957年、筑摩書房）

この詩人も幸いの住む、心休まる居場所を求めて彷徨ったんだろうね。

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

（若山牧水「別離」『若山牧水・島木赤彦・中村憲吉・木下利玄　集』、現代日本文学全集、1958年、筑摩書房）

この歌人も寂しさや貧しさから逃れられる心地よい居場所を求めて彷徨い歩いたんだろうなあ。

あまりに理想的な「幸い」の存する居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」を求めて流離うと、それについに巡りあえずに慨嘆することになってしまいかねないけどなあ。

でも、それでも、自らの人生の生老病死の有限のなかで、理想や希望や夢や幸せを追い続けるのが人間の性なのかもしれないね。

自分が自分でいられる場所。

一瞬であるにせよ、寂寥感や無常観や絶対矛盾的自家撞着の悩みをすっかり忘れ去れる場所。

やはり幸せを実感できる場所。

そんな居場所には、星の王子様じゃないけど、目には見えない本当に大切なものが在るかもしれないしね。

＊引用・参考文献は、すべて文中に記載。

以下、次稿に続く。